

集団保育における1、2歳児の生活習慣形成に関する研究

研究代表者	松田 典子	(文教大学専任講師)
共同研究者	和田上貴昭	(日本女子大学准教授)
	渡辺 治	(渡辺治建築都市設計事務所所長)
	高橋 久雄	(至誠児童福祉研究所所長)
	三浦 修子	(至誠第二保育園園長)
	長谷川育代	(万願寺保育園園長)
	廣瀬 優子	(しせい太陽の子保育園園長)
	霧田 清江	(至誠あずま保育園園長)
	高橋 智宏	(至誠いしだ保育園園長)
	高橋 滋孝	(至誠ひの宿保育園園長)
	高橋 紘	(至誠保育福祉研究所所長)

研究の概要

都内の保育所6園を対象に6月～11月までの約6か月間、月1回程度の観察調査を行い、1歳児クラスや1、2歳混合クラスにおける子どもの靴の着脱動作についてビデオ撮影による記録観察を行った。またそれとともに、チェックリストを作成し、子どもが靴の着脱ができるようになる様子を記録した。

調査の結果、以下のことが考察された。

- (1) 6月～11月頃までの約半年間に、各園において靴の着脱ができる割合は上がっている。
- (2) 各園により、チェックリストの集計結果による靴の着脱のできる割合に大きく差がみられた。
- (3) クラス形態が異なる特徴を持つ2園での集計結果を比較し、考察した。1、2歳児クラス混合の園では、2歳児の子どもが1歳児の子どもを手伝う様子が多くみられ、子ども同士の学び合いがよく観察された。

本研究では、基本的な生活習慣形成の一環として、靴の着脱に着目して子どもの様子を観察した。家庭とは異なる保育所という場での生活習慣形成に関わる学びは、保育者からのみならず、子ども同士でも学び合っている様子が見られ、子どもは、自分自身を取り巻く環境から、多くのことを学んでいる様子がみてとれた。

キーワード（5つ）：生活習慣、靴の着脱、保育所、集団保育、発達

I. 研究の動機と研究目的

1. 背景

近年、睡眠不足や朝食欠食といった生活習慣の乱れが子どもに多くみられることが取り沙汰されている。基本的な生活習慣の乱れは、心身に悪い影響を与えるだけでなく、小学校時期の子どもの学力や学ぶ意欲にも関係していると言われており、これはそれ以前の幼児期からの生活習慣が影響していることも最近では示唆されている（ベネッセ教育総合研究所(2012)）。したがって、誕生から幼児期までの生活習慣形成は、人間の生活の自立につながるだけであ

く、将来にわたっての人間の様々な活動を支える基盤になるものであるといえる。

生活習慣とは、人が生きていく上で必要な行為のなかで習慣化された行為である。そのなかでも特に基本的で日常的に繰り返されるものを「基本的な生活習慣」と呼び、通例は「食事」、「排泄」、「睡眠」、「着脱衣」、「清潔」の5つが挙げられる。その他にもあるが、乳幼児期においては、まずはこの5つが大切であるとされる（松田（2006））。

国が定めた保育園の保育のガイドラインである『保育所保育指針』の基本的な生活習慣に関する記載でも、おおむね2歳で、歩く、走る、飛ぶなどの基

本的な運動機能や指先の機能が発達し、それに伴い、食事、衣類の着脱などを自分でしようとし、おおむね3歳で、基本的な運動機能が伸び、それに伴い、食事、排泄、衣類の着脱などがある程度、自立できるようになってくることが示されている。その際に、食事、排泄、睡眠、衣類の着脱、身の回りを清潔にすることなどの生活習慣の習得は、急がせることなく、子どもの様子をよく見て、一人一人の子どもにとって適切な時期に適切な援助をしていくことが大切であることも触れられている。

本研究では、生活習慣の中でも、着脱衣と同様、乳幼児期でも身につけることが必要とされる靴の着脱に着目した。

靴の着脱は、幼児の発達の指標に用いられており、乳幼児精神発達診断法、遠城寺式・乳幼児分析的発達検査法、デンバー発達法などで取り上げられている。これらの発達に関する検査結果や標準年齢の報告からは、目安として、およそ2歳頃までに靴を脱ぐ行為、3歳頃までに靴を履く行為をおおむね習得できることが示されている。以下、これらの発達検査における検査結果の例を示す。

（1）乳幼児分析的発達検査法（昭和34（1959）年） 21・39 靴をぬぐ

「長靴や、ボタン・ひものない短靴などがひとりでぬげれば○とする。いつも、ボタン・ひものある靴をはかせているので、わからないという場合は、長靴ならぬげるかどうかをきき返すこと。このとき、足をふって長靴をぬぐというのでも靴がぬげればよい。」

年令	15か月児	18か月児	21か月児	24か月児	30か月児
被験児数	68	49	34	33	39
通過率	8.3	44.1	83.2	96.7	96.2

21・42 靴をはく

「…靴といっても種類が多く、はいたり脱いだりの難易は様々なので、ここではごく一般に、足をつっこめればはける靴を基準とした。ゆえに、編み上げ靴を除いて、その他の靴が履ければ○とする。はいたのちのボタンができなくとも、また、左右間違えてはいても○とする。」

年令	18か月児	21か月児	24か月児	30か月児	36か月児
被験児数	49	34	33	39	36
通過率	15.3	60.6	89.2	88.5	100

1959年度調査と1989年度調査の比較

21・39 靴をぬぐ

調査年	9か月児	10か月児	11か月児	12か月児	15か月児	18か月児	21か月児	24か月児
'59					8.3	44.1	83.2	96.7
'89					8.3	27.2	54.9	77.7
男					3.7	23.0	50.8	71.7
女					13.0	31.5	59.8	82.4

21・41 靴をはく

調査年	9か月児	10か月児	11か月児	12か月児	15か月児	18か月児	21か月児	24か月児
'59						15.3	60.6	89.2
'89						7.5	28.7	58.1
男						6.3	25.8	50.8
女						8.7	32.3	64.0

（2）遠城寺式・乳幼児精神発達診断法：第一試案（昭和33（1958）年）

問題 靴をひとりではなく。

判定 ひもつきでない運動ぐつをひとりで履ければ合格。

年齢	2:0～2:2	2:3～2:5	2:6～2:8	2:9～2:11
通過率	36.6	54.7	69.4	89.2

（参考）靴の着脱は、歩けるようになってから始まるため、いつ頃から靴で歩けるか。

問題 靴をはいて歩く。

判定 靴をはいて平坦な道を歩くことができれば合格。

年齢	1:0～1:1	1:2～1:3	1:4～1:5	1:6～1:8
通過率	42.4	80.7	98.0	98.0

本研究では、これらの発達の指標を参考にした。

これまでの先行研究は、幼児の生活習慣形成に関して、片付け行動については、永瀬（2012）などがあり、衣類の着脱については、高橋ほか（2016）、高橋ほか（2019）、靴履き行動については、甲賀ほか（2017）がある。しかし、靴の着脱行動を様々な特徴を持つ複数の保育所で比較し、靴を履く行為、脱ぐ行為を合わせて考察されているものはない。本研究では、靴の着脱について、子どもの発達（月齢別）、時期、保育所の違いでどのような違いがみられるのかを分析する。

2. 研究目的

本研究では、基本的な生活習慣形成の一つとして、靴の着脱に着目し、子どもの発達や環境によって、子どもが靴の着脱ができるようになるために、どのような違いがみられるのかを明らかにする。また保育所の違いによる靴の着脱ができるようになるまでの特徴を捉え、その環境の与える影響を考察する。

II. 研究方法

1. 対象者および観察場面

対象者は、東京都Z市内の保育園6園（園①～⑥）を対象とした。

期間：2019年6月～11月（6ヶ月間）

各園での観察期間は次の通りである。

園名	実施日								観察したクラス
	6月中旬	6月下旬	7月下旬		9月上旬	9月下旬	10月下旬		
園①									1歳児クラス15名
園②				8月上旬	9月中旬				1歳児8名、2歳児10名（1、2歳混合）
園③			7月下旬						1歳児クラス10名
園④	6月中旬		7月下旬				10月下旬	11月中旬	1歳児7名、2歳児8名（1、2歳混合）
園⑤			7月下旬				10月下旬		1歳児クラス20名
園⑥			7月上旬	8月下旬			10月下旬	11月中旬	1歳児22名、2歳児24名（8、10月は1、2歳混合で活動）

注）表中の灰色網掛けの日は、ビデオ撮影による観察は行ったが、チェックリストの作成はできなかった。

観察場面は、外遊び等へ出かける前後の靴の着脱場面とした。観察の記録は、ビデオカメラによる撮影で記録した。1回あたりの観察時間は、10～20分程度であった。またビデオ撮影と同時にあらかじめ作成しておいたチェックリストを用いて、園児ごとに靴の着脱のできた点や援助の有無をビデオ撮影と同時にあるいは撮影後に記録した。

2. 分析方法

撮影した画像は、記入したチェックリストとともに園児の靴の着脱の様子を確認した。声掛けの内容は映像から読み取ることはできないため、分析対象とはしなかった。

靴の着脱は、そのプロセスを観察して次の動作パターンに分類した。

1) 靴を履く動作

- 1-1. 靴のマジックテープ等をはずす
- 1-2. つま先を靴に入れる
- 1-3. 靴を履く（かかとを入れる）
- 1-4. マジックテープ等を押さえる

2) 靴を脱ぐ動作

- 2-1. マジックテープをはずす
- 2-2. 靴を脱ぐ

このプロセス別にチェックリストを作成し、園児別にこれらの項目が達成できているか否かを記録した。またその際に、保育者の援助の有無、また靴の

着脱場面別に、他の園児との関わりの有無も同時に記録した。

この作成されたチェックリストを基に子どもの月齢別、時期別、2園（1歳児、1、2歳混合の園）の比較を行った。

3. 倫理的配慮

調査に関して、事前に観察対象者の保護者に対して、保育所を通して観察内容等についての説明を行い、同意を得られた園児だけを調査対象とした。調査により得たデータは、調査協力者の個人情報特定されないように配慮した。

III. 結果

靴を履く・脱ぐ動作について、集計した結果は、次の通りである。

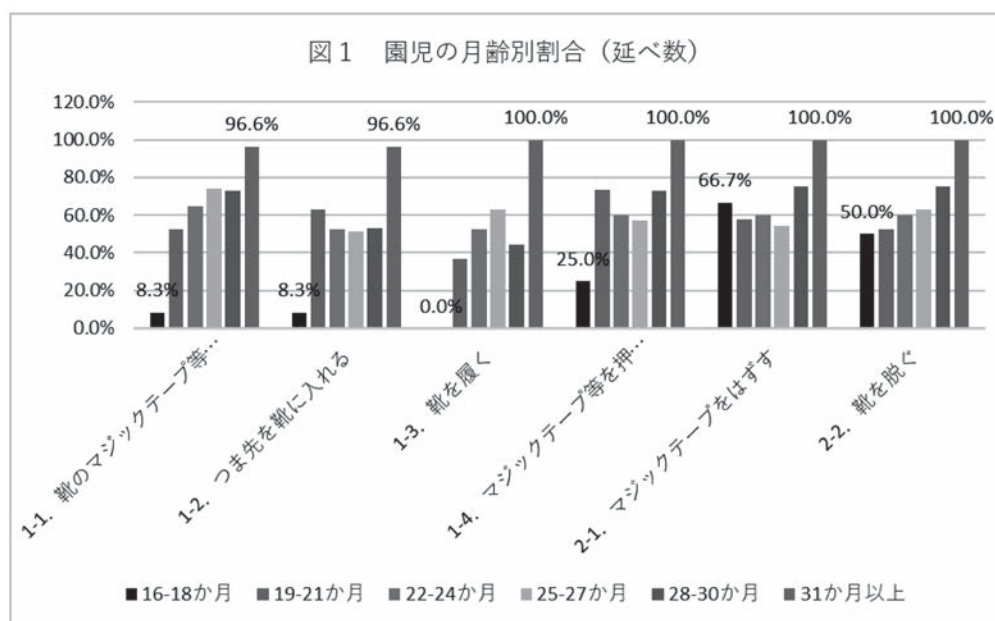
3-1 月齢別の靴の着脱割合

月齢別の靴の着脱割合は、以下の通りとなった（表1、図1）。ここでは、チェックリストを作成した園児の全てのデータを月齢別に分類したため、集計値は延べ数となる。16-18か月の月齢の子どもではほとんどが靴を履くことが難しく、靴を脱ぐ場面でもマジックテープを外して靴を脱ぐことができるのが約半数となっている。それが徐々に靴を履く動作も脱ぐ動作もできる割合が高くなっていき、31か月以上になると、ほとんどの子どもが靴の着脱ができるようになっていく。

表1 園児の月齢別集計（延べ数）

平均月齢	人数	1-1. 靴のマジックテープ等をはかず	1-2. つま先を靴に入れる	1-3. 靴を履く	1-4. マジックテープ等を押さえる	2-1. マジックテープをはずす	2-2. 靴を脱ぐ
16-18か月	12	1 8.3%	1 8.3%	0 0.0%	3 25.0%	8 66.7%	6 50.0%
19-21か月	19	10 52.6%	12 63.2%	7 36.8%	14 73.7%	11 57.9%	10 52.6%
22-24か月	40	26 65.0%	21 52.5%	21 52.5%	24 60.0%	24 60.0%	24 60.0%
25-27か月	35	26 74.3%	18 51.4%	22 62.9%	20 57.1%	19 54.3%	22 62.9%
28-30か月	70	59 72.8%	43 53.1%	36 44.4%	59 72.8%	61 75.3%	61 75.3%
31か月以上	29	28 96.6%	28 96.6%	29 100.0%	29 100.0%	29 100.0%	29 100.0%

図1 園児の月齢別割合（延べ数）



この月齢別の変化を発達検査と比較すると、例えば、乳幼児分析的発達検査法（'59年）では、靴を脱ぐのが24か月児で90%以上できるようになっているのに対し、本調査の結果では、22-24か月で60.0%、25-27か月で62.9%と低くなっている。同調査（'89年）は77.7%であることから、靴を脱ぐことができる子どもの割合は低下傾向にあるかもしれないと考えられる。

また靴を脱ぐよりも難しいとされる靴を履く動作では、同検査法の24か月児では、89.2%（'59

年）、58.1%（'89年）と開きがあるが、本調査では、22-24か月で52.5%、25-27か月で62.9%という結果となり、'89年の調査と近い結果となった。

同じ検査法で年代によって結果が変わってくるのは、靴の形状が変わってきているからではないかということが推察される。最近の靴は、足を守るためにかかとがしっかりとしたタイプが多いことや、マジックテープの普及により、足を入れるだけで容易に履けるといふ靴が少なくなってきているのかもしれない。

3-2 時期別の靴の着脱割合

観察時期（6～11月）の間に、園別に靴の着脱の様子にどのような変化があったのか考察した。

(1) 園①

6月中旬から10月中旬にかけて6回の観察を行った。ビデオ撮影と同時にチェックリストを作成した。今回、観察対象としたのは、1歳児クラス（15名）である。普段の活動は、クラス別に行っている。

園庭に出るための出入口は、高さは10cm程度、幅は一度に3人位が座れるほどである。全ての園児が同時に出入りにいることはできないため、その横のへりに一列に座って靴を履く姿も見られた。外での活動のために、一斉に座って履く様子が見られた。また靴を履き終わった子は、順番に待っている様子であった。

靴を履く様子を観察すると、1歳児では、手と足の動きを一緒にするのが難しい様子であった。思うように手が動かない子もいた。脱ぐときは両手を合わせて行うことができるが、履くときは、手をバラバラに動かさなければならず、靴を脱ぐよりも履くときの方が1歳児にとって難しい様子が観察できた。

また両手で靴を脱ぐ行為は、両手で帽子を外す行為とも似ており、両手を使った脱ぐ動作は、靴の脱ぐ動作だけではなく、生活動作の他の場面でも経験しているのではないだろうか。

靴の構造については、昨今では、マジックテープ付きの靴がほとんどであるが、マジックテープの取り外しも手指の巧緻性がなければ難しい作業のようであった。

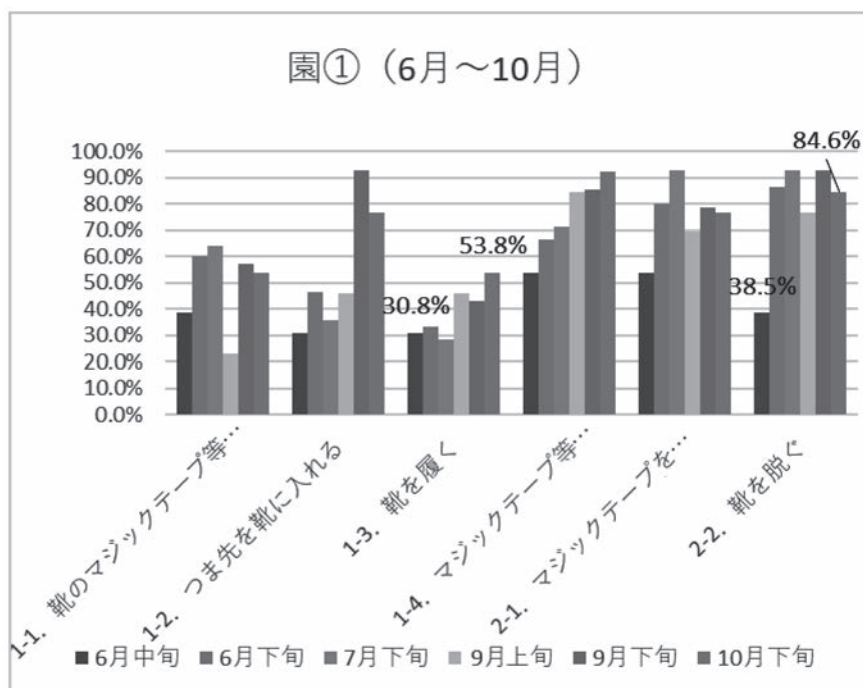
また保育者の動きを観察してみると、7月と10月の観察では、明らかに10月の方が、保育者の手がかからない様子となっていた。また7月の観察では、保育者が園児よりも先に外に出ているのに対し、9月、10月では園児よりも後から出ており、援助の仕方に変化がみられた。7月は先に保育者が出ること、子どもを外へと誘導する役割があると考えられるが、9月以降の後から出ている様子は、靴を履き終えた子ども達から率先して外に出ている様子であった。またこうした保育者の動きは、子ども全体の靴の着脱の速さにも関わっているのではないかと考えられる。

園①での靴の着脱の割合は、チェックリストを集計し、以下の結果となった（表2、図2）。

表2 園①での靴の着脱の割合

	平均月齢	人数	1-1. 靴のマジックテープ等をはずす	1-2. つま先を靴に入れる	1-3. 靴を履く	1-4. マジックテープ等を押さえる	2-1. マジックテープをはずす	2-2. 靴を脱ぐ
6月中旬	22.3	13	5 38.5%	4 30.8%	4 30.8%	7 53.8%	7 53.8%	5 38.5%
6月下旬	22.7	15	9 60.0%	7 46.7%	5 33.3%	10 66.7%	12 80.0%	13 86.7%
7月下旬	23.4	14	9 64.3%	5 35.7%	4 28.6%	10 71.4%	13 92.9%	13 92.9%
9月上旬	24.8	13	3 23.1%	6 46.2%	6 46.2%	11 84.6%	9 69.2%	10 76.9%
9月下旬	24.6	14	8 57.1%	13 92.9%	6 42.9%	12 85.7%	11 78.6%	13 92.9%
10月下旬	25.8	13	7 53.8%	10 76.9%	7 53.8%	12 92.3%	10 76.9%	11 84.6%

図2 園①での靴の着脱の割合



上表（図）から、6月から10月といった半年足らずの時期の間にも、子どもが靴の着脱ができるようになっていくことがわかる。例えば、「1-3 靴を履く」の項目では、6月中旬の時期にできた割合は30.8%であったのに対し、10月下旬には、53.8%と半数以上ができるようになっていく。また「2-2 靴を脱ぐ」の項目では、6月中旬の38.5%から10月下旬の84.6%と大きく変化していることがわかる。

また子どもの発達は直線的に伸びるのではなく、その時々気分によろということもあり、ある月の観測では、できていたことが、次の月の観測ではできていないという様子もみられた。全体的には、時期の変化とともに、できる項目が増えていることがわかる。

（2）園②（8月上旬、9月中旬）

園②では、外に出る際に、2歳児クラス、1歳ク

ラスと一緒に活動している（クラスによって、帽子の色が異なっている）。

またビデオ撮影による観察では、チェックリストの番号に対応して、観察対象児の帽子に番号を貼ってわかりやすくする工夫をした。

中庭に出るための出入口は、30cmの高さとなっている。この高さは、2歳児にとって座って履きやすい様子が見られた。

また2歳児が1歳児に靴を履かせている様子もビデオ撮影の記録から見て取ることができた。

早く靴が履ける子と時間がかかっている子の違いが見られたが、靴のサイズが合っている子はすぐに履いているようであった。子どもの足に靴が合っているかどうかといった靴のサイズの問題も靴の着脱の動作に大きな影響を与えている可能性がある。

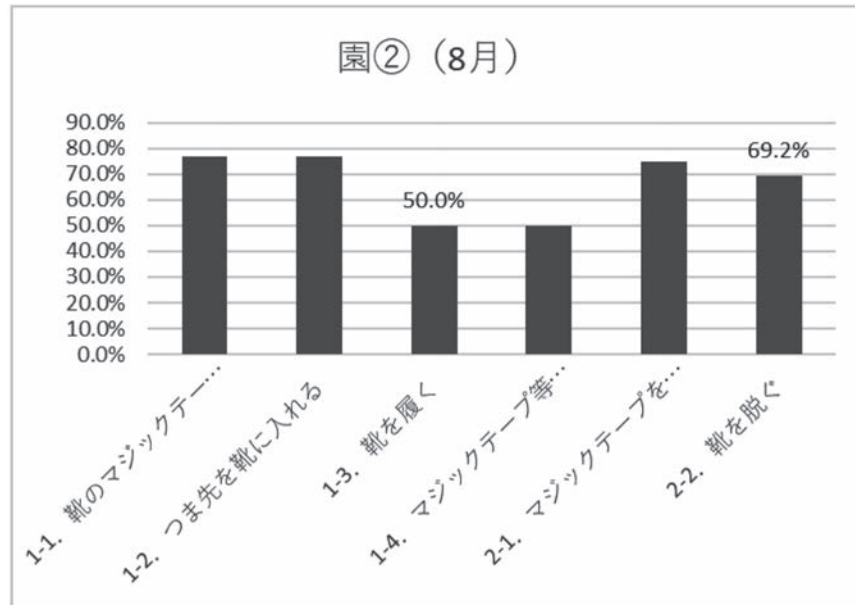
園②での靴の着脱の割合は、以下のようなになった（表3、図3）。

表3 園②での靴の着脱の割合

	平均月齢	人数	1-1. 靴のマジックテープ等 をはずす	1-2. つま先を靴に 入れる	1-3. 靴を 履く	1-4. マジックテープ 等を押さえる	2-1. マジックテープ をはずす	2-2. 靴を脱ぐ
8月上旬	28.8	13 (12)	10	10	6	6	9	0
			76.9%	76.9%	50.0%	50.0%	75.0%	69.2%
9月上旬	29.8	-	-	-	-	-	-	-
			-	-	-	-	-	-

注1）9月はチェックリストを作成できなかった。注2）1名分記録がなく、アミかけは総数が12人となっている。

図3 園③での靴の着脱の割合



8月上旬の結果のみ、チェックリストを作成することができたので、この結果を集計した。「1-3 靴を履く」は50.0%、「2-2 靴を脱ぐ」は69.2%と半数以上ができていた。

(3) 園③ (8月下旬)

ビデオ撮影による観察で、保育園の玄関から外に出る時の活動の様子が観察できた。外に出る活動は、1、2歳児クラスが混合で行っている（クラスによって帽子の色が異なるので、ビデオ観察では年齢クラスが区別できる）。

1、2歳児の混合であるため、2歳児が1歳児の靴を履くのを手伝ったり、子ども同士で関わり合っている様子がよく観察された。

また小規模園で園庭がないため、一斉に靴を履き、みんなで外に出かけるが、先に靴が履き終えた子は、玄関そばで子どもを待っている。そのため、あまり長い間、子ども達を待たせることができないため、保育者はできない子をゆつくりと待たずに、すぐに履かせないといけない状況にもあるとも考えられた。

1歳児への援助として、まずは、靴を履くときには、最後のマジックテープだけ抑えさせることから始めるということであった。保育者の援助は、玄関の構造からか、子どもの後ろからしている。前述の園①では、7月では、保育者が子どもの前から援助をしているといった違いがあることから、玄関の環境によって、援助の仕方や子どもの様子も変わっているのではないかと考えたことも推察された。

(4) 園④

小規模園であり、6月中旬から11月中旬までの4回の観察の中で、1歳児、2歳児が混合で活動していた。

9月のビデオ撮影による観察では、1、2歳児が外に行くために一緒に活動をしていて、2歳の子が1歳の子の靴を履かせてあげようとしている様子も見られた。この後の活動として、1歳児と2歳児で手をつないで散歩に行くことになっているので、2歳児はこうした次の活動がわかっていて、手伝っている可能性もあると考えられた。

外に出るための出入り口は、7.5cm位の高さがあり、横一列に並べるような環境となっており、子どもが自分で靴を脱ぎ履きしやすい様子であった。

また子ども達は、靴ではなく、靴下を履くのに苦戦している様子も見られた。

2歳児になると、靴を履いた後、保育者に左右が合っているかを確認する子どもの姿が見られた。また先生が靴を履いている様子を見て学んでいるような子どももいた。

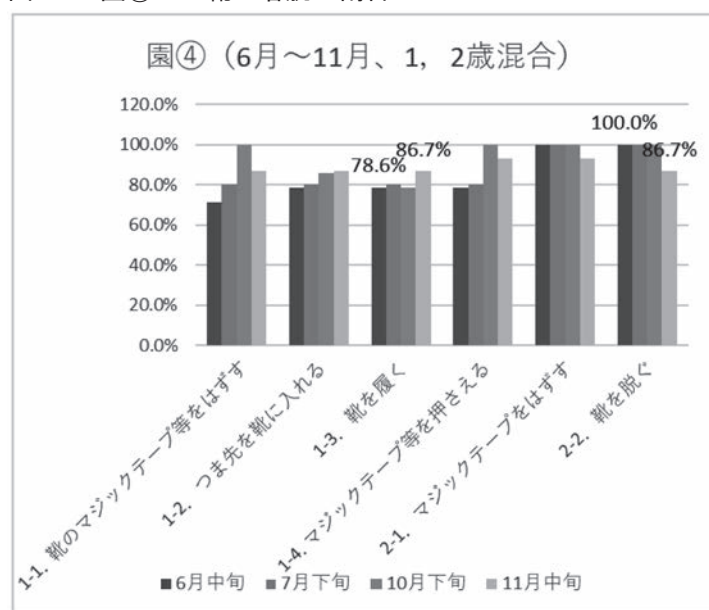
園④での靴の着脱の割合は、以下のようになった(表4-1、図4-1)。

6月中旬から11月中旬までのチェックリストの結果を集計した。「1-3 靴を履く」は78.6%（6月中旬）→86.7%（11月中旬）、「2-2 靴を脱ぐ」は、ほぼ100%で推移していた。

表4-1 園④での靴の着脱の割合

	平均月齢	人数	1-1. 靴のマジックテープ等をはかず	1-2. つま先を靴に入れる	1-3. 靴を履く	1-4. マジックテープ等を押さえる	2-1. マジックテープをはかず	2-2. 靴を脱ぐ
6月中旬	28.1	14	10	11	11	11	14	14
			71.4%	78.6%	78.6%	7.1%	100.0%	100.0%
7月下旬	29.0	15	12	12	12	12	15	15
			80.0%	80.0%	80.0%	80.0%	100.0%	100.0%
10月下旬	32.6	14	14	13	13	14	14	14
			100.0%	92.9%	92.9%	100.0%	100.0%	100.0%
11月中旬	32.8	15	13	13	13	14	14	13
			86.7%	86.7%	86.7%	93.3%	93.3%	86.7%

図4-1 園④での靴の着脱の割合



また1、2歳児混合であるが、その中から2歳児の値を除き、1歳児のみ抽出した結果が、表4-2、図4-2である。

「1-3 靴を履く」は50.0%（6月中旬）→85.7%（11月中旬）、「2-2 靴を脱ぐ」は、ほぼ100%で推移していた。

（5）園⑤（7月下旬、10月下旬）

園⑤では、ビデオカメラを設置するのではなく、玄関に以前から設置されていた監視カメラ（自動撮影）を用いての観察を行った。そのため、玄関全体の見通しはよかったが、子どもの靴の着脱の様子は、子どもの背面からの観察となった。また動作の確認が困難だったため、チェックリストを作成すること

はできなかった。

7月下旬の撮影では、2歳児クラスの様子が観察された。玄関は広く、緑のシートの場所は、靴を履いていても脱いでいてもよいスペースとなっている。

最後に、男の子が3人残り、保育者にやってもらいたがっている様子などが観察できた。

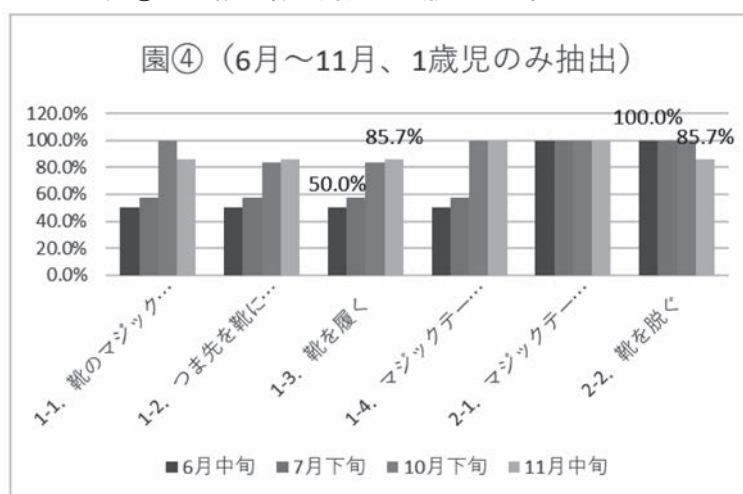
10月下旬の撮影では、2歳児と1歳児が一緒に活動しており、1歳児が靴を履く手伝いを2歳児がする場面が2回程度確認できた。普段も外遊びの活動は、1、2歳児が決まったペアになっており、そのペアで、2歳児が手伝いをしているということであった。

7月（2歳児のみ）の映像と比較してみると、7月は、靴を履く以前に、玄関先に向かうまでに時間

表4-2 園④での靴の着脱割合（1歳児のみ抽出）

	平均月齢	人数	1-1. 靴のマジックテープ等をはかず	1-2. つま先を靴に入れる	1-3. 靴を履く	1-4. マジックテープ等を押さえる	2-1. マジックテープをはずす	2-2. 靴を脱ぐ
6月中旬	21.2	6	3 50.0%	3 50.0%	3 50.0%	3 50.0%	6 100.0%	6 100.0%
7月下旬	22.9	7	4 57.1%	4 57.1%	4 57.1%	4 57.1%	7 100.0%	7 100.0%
10月下旬	25.8	6	6 100.0%	5 83.3%	5 83.3%	6 100.0%	6 100.0%	6 100.0%
11月中旬	26.7	7	6 85.7%	6 85.7%	6 85.7%	7 100.0%	7 100.0%	6 85.7%

図4-2 園④での靴の着脱割合（1歳児のみ抽出）



がかかっている子がいるのが観察された。7月の時期では、まだ靴を履こうとする意志もあまりなく、時期の変化とともに、靴を履くことが習慣化されてきているということ、また10月は1歳児も一緒だったので、1歳児と一緒に外に早く出ないといけないと思うのではないかと考えられた。

（6）園⑥

園⑥では、7月上旬から11月中旬まで4回観察を行った。

7月の観察では、1、2歳混合クラスでの外活動の様子が観察された。出入口が3名程度が入る幅のため、2～3人が順番に出入りしている。靴を立てて履く子もいれば、座って履く子も見られた。

8月の観察では、最初に1歳児が脱ぎ、その後、2歳児という様子が見られた。1歳児は、出入口で

一人ずつ脱いでいる。2歳児になると、両足一緒に靴を脱いでいる様子などが見られた。

10月の観察では、2歳児の靴を履く様子が観察できた。出入口は、観察対象児が3人で座る場所が埋められている。また対象児の靴の多くは、マジックテープで留めるタイプであるが、ひもタイプのほうが留めやすい様子も見られた。

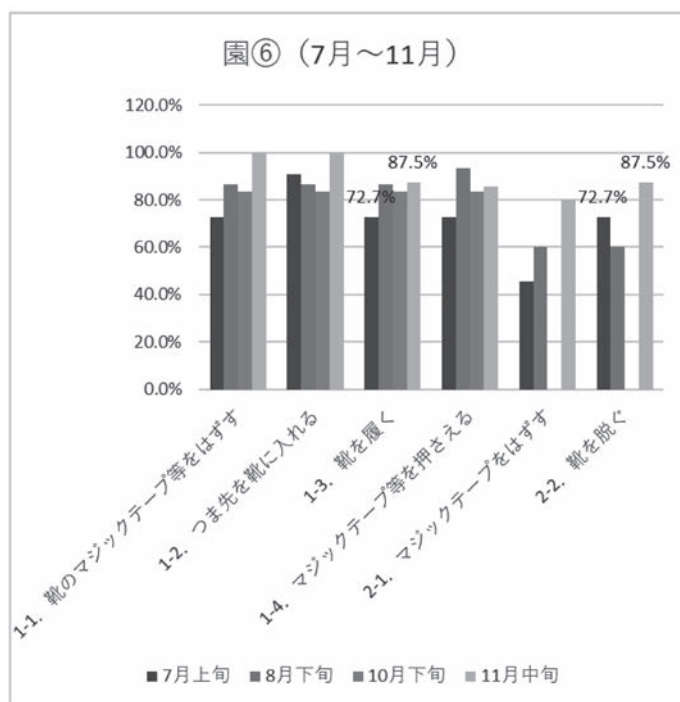
園⑥では、7月上旬から11月中旬までのチェックリストを集計し、靴の着脱割合は、以下の結果となった（表5、図5）。

「1-3 靴を履く」は、72.7%（7月中旬）→87.5%（11月中旬）と靴を履くことができる割合は高くなり、「2-2 靴を脱ぐ」についても、72.7%（7月上旬）→87.5%（11月中旬）と割合は高く変化していた。

表5 園⑥での靴の着脱割合

	平均月齢	人数	1-1. 靴のマジックテープ等をはかず	1-2. つま先を靴に入れる	1-3. 靴を履く	1-4. マジックテープ等を押さえる	2-1. マジックテープをはずす	2-2. 靴を脱ぐ
7月上旬	27.727	11	8 72.7%	10 90.9%	8 72.7%	8 72.7%	5 45.5%	8 72.7%
8月下旬	27.73	15	13 86.7%	13 86.7%	13 86.7%	14 93.3%	9 60.0%	9 60.0%
10月下旬	29.7	6	5 83.3%	5 83.3%	5 83.3%	5 83.3%	－ －	－ －
11月中旬	30.3	12	7 100.0%	10 100.0%	7 87.5%	6 85.7%	4 80.0%	7 87.5%
		(工程別総数)	7	10	8	7	5	8

図5 園⑥での靴の着脱割合



3-3 2園での比較（クラス形態別の比較）

園①は、普段の活動は年齢別のクラス単位であり、園④は小規模園で、外活動は1、2歳児の混合クラスとなっている。そこで、園①（1歳児クラスのみ）と、園④（1、2歳児混合クラスにおける1歳児）とで比較した。同じ観察時期の変化の比較ということを考慮し、6月と10月の変化を表したのが、表6-1（園①）、表6-2（園④）である。

これらの表から2園を比較すると、園④の1歳児は、靴の着脱ができるようになった割合が、園①よりも高い傾向にある。そして、ビデオ観察の結果

で、特徴的であるのが、子ども同士での関わり合いである。表6-2の園④は1、2歳児クラス混合のため、2歳児の子どもが1歳児の子どもを手伝う様子が多くみられた。また6月にはこうして手伝ってもらっていた子どもが10月になると、靴を履くことができるようになっていく（児童No.12t）。子どもの発達により、月齢が上がればだんだんできるようになってくるが、子ども同士の学び合いによってもよりできるようになるのではないかと考えられた。

表6-1 園①の靴の着脱の変化（6月、10月）

	児童No.	性別	1-1. 靴のマジックテープ等はずす	1-2. つま先を靴に入れる	1-3. 靴を履く	1-4. マジックテープ等を押さえる	子ども同士の関わり合い	備考	2-1. マジックテープをはずす	2-2. 靴を脱ぐ	子ども同士の関わり合い	備考
6月下旬	1	男										
	2	男								●		
	3	女	●	●	●	●			●	●		
	4	女	●	●	●	●	●		●	●		
	5	女	●			●	-		●	●		
	6	男	●					1-4 手は添える	●	●		
	7	女		●		●			●	●		
	8	男	▲	●	▲	▲	-		●	●		
	9	男	▲	▲	▲	▲			●	●		
	10	女	●	●	●	●			●	●		
	11	男	●	●		●	-		●	●		
	12	女	●	▲		●			●	●		
	13	女				●			●	●		
	14	女										
	15	男					●		●	●		
	計		9	8	5	10	2		12	13	0	
10月下旬	1	男				●					●	
	2	男				●				●		
	3	女	●	●	●	●				●		
	4	女	●	●	●				●	●		
	5	女	●	●	●	●			●	●		
	6	男										欠席
	7	女				●			●	●		
	8	男	●	●	●	●			●	●		
	9	男	●	●	●	●			●	●		
	10	女										欠席
	11	男	●	●	●	●			●	●		
	12	女	●	●	●	●			●	●		
	13	女		●		●			●	●		
	14	女		●		●			▲			
	15	男		●		●			●	●		
	計		7	10	7	12			10	11	1	

注1) ▲は片足のみ、注2) 児童No.1～15は1歳児クラス

表6-2 園④の靴の着脱の変化（6月、10月）

	児童No.	性別	1-1. 靴のマジックテープ等をはかず	1-2. つま先を靴に入れる	1-3. 靴を履く	1-4. マジックテープ等を押さえる	子ども同士の関わり合い	備考（立って履く、など）	2-1. マジックテープをはかず	2-2. 靴を脱ぐ	子ども同士の関わり合い	備考（立って脱ぐ、など）
6月下旬	1y	女	●	●	●	●	1歳6か月男児の手伝いをした		●	●		
	2r	男	●	●	●	●			●	●	友達に話しかける	足だけで脱ぐ
	3s	男	●	●	●	●			●	●		
	4y	男	●	●	●	●			●	●	暫く座っていたが、友達が来たら話しながら脱ぐ	
	5y	男		●	●	●			●	●		
	6s	女	●	●	●	●	自分が履き終わった後、1歳9か月男児の手伝いをした	履いた後左右があっているか保育士に確認した	●	●		
	7h	男	●	●	●	●		立って履く	●	●		
	8h	男	●	●	●	●			●	●	友達に話しかけられる	
	小計（2歳児）		7	8	8	8			8	8		
	9i	女										欠席
	10m	女	●	●	●	●			●	●		
	11s	男	●	●	●	●			●	●		
	12t	男					2歳8か月女児が手伝う。	最後は保育士が介助する	●	●		かかとが脱げず、保育士が「手伝う事で最後は自分で脱ぐ
	13h	男						保育士任せで自分の手を出さない	●	●		出来たことを自分で拍手している
	14s	男	●	●	▲	●		片足は保育士が履かせる	●	●		
	15i	男					3歳2か月女児の介助で履く		●	●		「ここ」とマジックテープを指差しすると、全て一人で出来た
	小計（1歳児）		3	3	3	3			6	6		
	合計		10	11	11	11			14	14		
10月下旬	1y	女	●	●	●	●			●	●		
	2r	男	●	●	●	●			●	●		
	3s	男	●	●	●	●			●	●		
	4y	男	●	●	●	●			●	●		
	5y	男	●	●	●	●	隣とおしゃべりしながら履く		●	●		
	6s	女	●	●	●	●	隣とおしゃべりしながら履く		●	●		
	7h	男	●	▲	●	●		大人が片方のつま先を入れると後は全て自分で行う	●	●		
	8h	男	●	●	●	●			●	●		
	小計（2歳児）		8	8	8	8			8	8		
	9i	女										欠席
	10m	女	●	●	●	●			●	●		
	11s	男	●	●	▲	●		左のかかとを大人に入れてもらった	●	●		
	12t	男	●	●	▲	●		右に座こうとしていた左の靴を大人が左に履かせると右は自分で履く	●	●		
	13h	男	●	●	●	●			●	●		
	14s	男	●	●	●	●		立って座こうとするがすぐ座る	●	●		
	15i	男	●			●			●	●		右の靴を脱ぐように促されると両方の靴を自分で脱いだ
	小計（1歳児）		6	5	5	6			6	6		
	合計		14	13	13	14			14	14		

注1) ▲は片足のみ、注2) 児童No.1y～8hは2歳児クラス、No.9j～15iは1歳児クラス

IV. 考察

本研究では、都内の保育所6園で、1、2歳児クラスを対象に、6月～11月頃まで子どもの靴の着脱の様子を観察し、保育所の違いによってどのような違いがみられるのかを考察した。

まず、子どもの発達により、靴の着脱ができるか否かは大きく異なるが、6月～11月頃までの約半年間という限られた期間においても、子どもの月齢が上がるると同時に、どの園においても靴の着脱ができる割合は上がる傾向にあった。これまでの発達検査との比較からも、月齢が上がるにつれてできるようになっていく様子を捉えることができた。

次に、各園によって、チェックリストの集計結果による靴の着脱のできる割合に大きく差がみられた。クラス形態（1歳児クラスのみか、1、2歳児混合クラスか）、保育者の援助の仕方や考え方の違い、保育所の特徴（小規模園であり、園庭がないなど）、出入口の特徴などで、同じ法人内の保育園であっても、大きな違いがみられた。

最後に、クラス形態が異なる2園（園①、園④）で、どのような特徴がみられるのかを考察した。園①は、年齢別のクラス単位であり、園④は小規模園で外活動は1、2歳児の混合クラスとなっている。そこで、園①（1歳児クラスのみ）と、園④（1、2歳児混合クラスにおける1歳児）とで6月と10月の変化を比較した。園④は1、2歳児クラス混合のため、2歳児の子どもが1歳児の子どもを手伝う様子が多くみられ、子ども同士の学び合いがよく観察された。

本研究では、基本的な生活習慣形成の一環として、靴の着脱に着目して、保育所における子どもの様子を観察した。家庭とは異なり、保育所という場での生活習慣の学びは、保育者からのみならず、子ども同士でも学び合っており、子どもは、自分自身を取り巻く環境から、多くのことを学んでいる様子を見て取ることができた。

V. 今後の課題

今回の調査は、保育所6園の1、2歳児クラスを対象として調査を行ったが、いくつかの課題が残されている。

まず、各園の対象クラスの子どもの人数が10数名となるため、集計結果が子ども一人ひとりの結果に左右されやすく、さらに多くのデータを集めることである。

また今回の調査では、クラス形態の違い（1歳児のみクラス、1、2歳児の混合クラス）による比較を試みた。たしかに1、2歳混合クラスでは、2歳児が1歳児を手伝う場面があるなど、子ども同士の交流の場面が多くみられた。しかしながら、クラス形態だけでなく、1、2歳児の混合クラスの園は、小規模保育所となるため、保育者が少人数規模のクラスの中で子どもをよく見ることができないのではないかとといった人的な側面や、また園庭がないため、園外に外遊びに出かけなければならないといった物的な側面での違いがある。園庭がないということは、例えば外遊びに出かけるために、皆で同時に外に出られるように、保育者が身支度を早くさせたがる傾向があると考えられることや、園庭のない保育所では、1日朝夕の2回程度、外に行くので、園庭のある保育所よりも、外活動が多くなり、保育所での靴を履く経験が多くなるのではないかとといったことが考えられる。

さらに、各園の出入口（玄関）の様子を観察すると、出入口の高さ（0～30cm）、幅（子ども3人程度～10名以上）に大きな違いがみられ、こうした環境の違いも、靴の着脱に大きな影響を与えるのではないかと考えられた。

こうした保育所の特徴の違いを加えて、子どもを取り巻く環境の違いによって、靴の着脱の様子にどのような違いがみられるのか、さらに考察を深めていく必要がある。

VI. その他（他園での取り組み事例）

本研究では、他園における子どもの靴の着脱の取り組みを知るために、他の保育所5園（東京都4園、長崎県1園）にアンケート依頼し、各園の園長、主任、1、2歳児担当の保育経験のある保育士から回答を得た。

以下、靴の着脱に関する取り組み事例について、本研究においても参考にさせていただいたことの一部を紹介させていただく。

- （1）クラスや子供の月齢や発達に応じて、保育者が声掛けを工夫していること
- ・ 短い文章で子どもにもわかる簡単な言葉を使っている
- ・ 自分がやりたい気持ち強い子には見守ったり、さりげなく介助したり、どのようにすればいいのか見本を見せたり、できた時には沢山褒める
- ・ 少しずつ子ども自身でやりたい気持ちが出て来た

時期に大切にしていき、子ども自ら取り組んでいる時はじっくりと待てるようにしている

- ・くつを自分で履けるようになるまでは、くつの前後を支え「一緒に持ってみようね」と保育士と一緒に“履けた”を味わえるような工夫をしている
- ・一人ひとりのどこまで自分でできるかを把握し、できるところは頑張る姿を認めながら見守り、難しいところはやってあげるのではなくやり方を伝えながら一緒にやってみる
- ・1歳児とは言え、4月生まれと3月生まれでは、できることに差がある。やってみようとする気持ちを育てながら、お手伝いをして徐々に1人でできるようにしている。
- ・まず自分の靴が分かるように声をかけ、足を入れやすいように入り口を広くしておき、分かりやすいような声掛け
- ・ゆっくり話したり、途中まで手伝うなどの工夫をしている。又、やろうとしている姿が見られたら様子を見たり大いに誉めている。
- ・子どもが自分で頑張ろうとしている姿を見守り、できたときや失敗しても一生懸命取り組んだ姿を認めてたくさん誉めることを心がけています。子どもが苦手意識を持っているところには私自身が全力で楽しみ、少しでも挑戦してみようという気持ちを感じられるように声かけを工夫している。
- ・出来ている子をたくさん誉め、自信が持てるようにするとともに難しい子には「一緒に履こう」と声を掛け、…子どものやる気がでるような声掛けをしている。
- ・声掛けは月齢に合った言葉（わかりやすい、連想しやすい）掛けを行う、また絵や表で視覚からもわかり易くする
- ・マジックテープのある靴は「ビリビリはがしてね」左右が分かるように「けんかしてないかな」2歳児後半には立って靴が履ける
- ・1歳児クラスは手伝ってもらいながら自分で履けた喜びを感じられるようにしたり、2歳児クラスは1人で履けるようになってから（秋くらい）左右を意識できるように声掛けをしたりする。
- ・一人ひとりの性格、成長に合う声掛けをしている。できた、履けた際は一緒に喜ぶ。やって（ほしい）タイプは、実況中継のように「ここをこうやって」など伝えていく。自分で（やる）タイプには、まずは見守り、難しい点のみさりげなく手伝う。
- ・マジックテープは外しておく子、「びりびりしてごらん」でできる子などそれぞれに対応している。
- ・行動に関して1つ1つ言葉をかけて行動する。イ

ヤイヤに対して丁寧に「○○したかったのかな」など子どもの反応に対応している。

- ・靴を履き始めた子には外を歩く楽しさを。自分ではきたがったり、履けるようになった子には足の入れ方や面ファスナーの扱いについて声をかけている
- ・低月齢児には、手を添えながら（介助しながら）、「びりびりして」「足を入れて」など行動を具体的な言葉にしてい
- ・自分で着脱が難しい子どもには「足を入れるよ」などできるところまで声をかけ自分で少しずつできるようになってきた子どもにはその子どもに分かりやすい言葉を使って伝えるようにしている
- ・子どものわかりやすい言葉、伝わりやすい響きを選んで声掛けをしている。
- ・フレーズの長さ、声の大きさ、本人との位置（体勢、目の高さ等）、わかる語彙、声のトーン
- ・子どもの理解力に合わせて簡単な単語を使って話すようにしている
- ・話す速さ、低い月齢グループには一度に一つのことだけ話す。内容も月齢によりわかりやすく、月齢が上がると説明を少しずつ細かくする。月齢の子が使う言葉を入れてわかりやすくする。
- ・子どもたちに分かりやすいようにマジックテープをとめるときは「ぺったん」等と言って声掛けをしている。
- ・個々の発達に応じて、子どものできる力や気持ちに応じて声掛けをしたり、手伝ったりしている
- ・まずは一緒にやってみることで、子どもが自ら“やりたい”という気持ちを育てる。やろうとしている子にはまずほめて自信につなげていく。
- ・一人で履こうとしている子には、励ましたり、履き方を伝える。介助が必要な子には、一人で履く意欲が出るように声掛けをする。
- ・言葉の理解に合わせて…分かりやすい声掛けを心掛けていく
- ・その子どもがどのくらいのレベルのことが出来るのか考え難しすぎることはせずに、意欲を持って行えるよう見本を見せながら声掛けをする。
- ・まだ難しい子には見本を見せたり、一緒に行いながら行う。
- ・一人で履けるようになってきたら、左右があっているか確認するよう声掛けをしている。
- ・周囲への関心や意思を伝えたい欲求も高まっているので「自分でしたい」という意欲を損なわないような声かけに心がけ、できなくても向上心で終えるようにしている。

- ・靴のかかとを持って履くよう伝え、手を添えたりする。
- ・一人で着脱が難しい子どもには、1つ1つわかりやすく声掛けをしている。スムーズに着脱ができるようになると、左右反対などをわかりやすく声掛けをしている。

⇒ 子どもの性格や成長に合わせて、一つ一つの工程をわかりやすく、保育者は声掛けや援助を工夫していることがわかった。

(2) 子どもの自主性を重んじる支援

- ・興味がない子には、無理せず、やる気がある子は時間をかけ、思う存分取り組めるようにする
- ・0歳児クラスでも自分の靴が分かり足を入れようとする子もいる為、その時にはしばらく見守りさりげない援助を行っている。
- ・子どもが自分で靴を履く、意欲を大切に、保育者に援助を求めるまでは見守る。
- ・着脱のでき具合を保育士で共有し、同じ支援をするようにしている。
- ・1人ひとりのペースを大切にしたいと思い、心がけてはいるが、人数が多い分、焦らせてしまうことともある現状がある。
- ・2歳児クラスでは、自分でやりたいという気持ちも育ってくる。
- ・促しが必要、自主性のみだと身にまとうものなので危険の原因となる。
- ・個々の差が大きい全員そろうのを待ってから遊ぶようにしているのでどうしても時間を要する子を急がせてしまったり、ゆっくりと見てあげられないのが現状で、そこは改善しなければと感じている。

⇒ それぞれの年齢や月齢に応じた方法があるが、その月齢にとらわれず、子どものやりたい気持ちを優先に援助を行っていることがわかった。

(3) 保護者に対する支援

- ・子どもが履きやすい靴を用意してもらう
- ・自分で脱ぎ履きしやすいもの。選び方など。
- ・靴の形等で自分で履けない場合に声をかけている
- ・靴の形によっては難しいものやその子の発達にあっていない物があるので場合によっては声かけをしている。
- ・一人で少しでもやった感が持てるようマジックテープの物をお願いしている

- ・靴の形状について履きやすいものを持ってくるよう声掛け（ソールがしっかりしている、マジックテープ式、開閉部分がぱっとしっかり開くもの、歩き初めには柔らかくないもの）
- ・最初は簡単に着脱しやすいマジックテープが一つになっているタイプを勧めるなど
- ・履きやすいマジックテープを勧めたり、上履きのかかとに紐をつけるように話をしている。
- ・バンドのないスリッパタイプではなく、バンドのある靴のほうが子どもたちが履くには履きやすいことを伝える
- ・靴の後ろに紐をつけて子どもたちが引っ張り足を入れられるようにしたり、マジックテープのバンドの靴で脱ぎ履きしやすい物にしている
- ・履きのかかとに紐をつけてもらい子ども自身が履きやすいように促す。
- ・全体的にはではないが、「こういう靴がいいと思う」程度の声掛けはすることもある。

⇒ 靴の着脱が難しい場合、保護者に声掛けを行っている。またマジックテープの靴が着脱しやすいと考え、保護者にも勧める傾向にある。

(4) クラスの形態（人数、縦割り保育など）によって、靴の着脱の仕方や子どもの習熟度などに違いがあるか

- ・人数が多いとゆっくり待ったり見てあげる場面が少なくなる場合もある
- ・縦割りだと上の子が手伝ってくれる環境になりやすい
- ・縦割りで、異年齢児を見てやってみようと思えることがある
- ・すぐに手伝ってしまうクラスとじっくり待つてあげるクラスとある
- ・人手があれば1人ひとりに時間を丁寧にかけあげられる
- ・目が行き届きやすいかや、発達によっても違いはあると思う。
- ・見本になる子や率先して行っている子が多いほど習熟度は上がると思う
- ・少人数で、丁寧にやり方を知らせていったほうが身に付くと感じる。また、少人数のほうが「自分でやろう」とする気持ちに寄り添いやすい
- ・少ない人数では丁寧に教えられたり、縦割りでは上の子どもが着脱する姿を見て自分でやろうとする気持ちが出てくる
- ・人数が少ないと1対1で教える時間が増える。縦

割り保育の保育園に通っている子（1歳児）が早くから上の年齢の子どもの真似をして着脱しようとする姿が見られていた。

- ・人数が多かれ少なかれ、保育士がしっかり向き合っていれば違いはないかと。
- ・クラスというより、個人のやってみようとする気持ちが持てるかが大きい
- ・個人差はあると思うが、それ程違いはないと感じる

⇒ 縦割り保育では、大きい子どもが手伝ってくれることがある。また率先してやる子どもがいたり、クラス全体での習熟度が上がることがある。また少人数の方が、丁寧にやり方を教えることができ、身に付きやすい傾向があると考える保育者が多くいる。

（5）子ども同士のかかわりの中で、靴の着脱について学び合いなどの様子は見られるか。

- ・できる子がやってあげようとしたり手伝ってあげる姿がある
- ・周りの子の姿を見てマジックテープなどのはがし方や靴に足を入れようとしている
- ・友達に靴を履かそうとしたり、脱がせてあげたりしている
- ・一人で履いている子や早い子をじっと見て学習しているときもある。
- ・左右の違いを伝えたり、どちらが先に履けるか競っている
- ・学び合いではいなくても、家では自ら履けない子が、保育園に来ると履こうとする場面は見られる。
- ・着脱が上手な子がほめられているのを見て、まねて行おうとする姿が見られる。（1歳児くらいから）
- ・自分で履いているお友達を見ると、同じように履こうとしている姿が24ヶ月頃から見られる。
- ・月齢の高い子が低い子に教えてあげているのはよく見かけます。（ベルトを止めてあげる）3歳3ヶ月頃～
- ・好きなお友達の真似で学んだり、年が上の子が教えてあげるなどの学び合いが見られる。（2歳6ヶ月頃から）

⇒ できる子が手伝ってあげたり、お互いに観察して、ほめられているのをマネしようとしている様子などがある。

（6）その他

- ・靴を履くときに左右間違わないような声掛けを行っている
- ・左右が違うことが3・4歳になってもみられることがある。右、左をしっかりと伝えていきたい。
- ・左右の違いが分かるよう、正しい並びと違う並びの写真を撮って掲示したときがあった。
- ・戸外で靴を履いたら左右の確認、マジックテープが取れていないかなど見てから遊ばせるようにする。
- ・月1回外靴の持ち帰りをして洗濯とサイズ確認を全体で統一して行っている。
- ・履きやすいように牛乳パックでいすを作り座って履きやすいようにする。
- ・靴の着脱に併せて、下駄箱への出し入れも子どもたち自身でできるよう声掛けをしています。（整理整頓につなげていくため）

⇒ 靴の左右の違いがわかるようにする工夫がみられた。また靴が履きやすいように、牛乳パックで椅子を作り、高さを出すことで履きやすいように工夫していた。

VII. 謝辞

最後になりましたが、本研究の実施にあたり、本研究にご協力いただきました調査協力者の皆様に感謝申し上げます。

参考文献

- 厚生労働省（2018）『保育所保育指針解説』 フレーベル館
- 遠城寺宗徳（2015）『遠城寺式・乳幼児分析鉄発達検査法〔九州大学小児科改訂新装版〕第4刷』、慶応義塾大学出版会
- 津守真、稲毛教子（1995）『増補乳幼児精神発達診断法—0才～3才まで—増補版第9刷』大日本図書
- 甲賀崇史、根ヶ山光一（2017）「保育所のテラスにおける幼児の靴履き行動の発達の検討」『保育学研究』55, 52-167
- 高橋美登梨、川端博子、鳴海多恵子（2016）「集団保育における着脱動作に対する保育者の意識」『日本家政学会誌』67(3), 151-160
- 高橋美登梨、一戸玲美、川端博子（2019）「動作の分類からみた3歳児の着脱の特徴」『日本家政学会誌』70(4), 204-213

- 永瀬祐美子、倉持清美（2012）「幼児は生活習慣行動をどのように受け止めているのか—集団保育の片付け場面への着目から—」『東京学芸大学紀要』63(2) 179-185
- ベネッセ教育総合研究所（2012）『幼児期から小学校1年生の家庭教育調査 報告書』,ベネッセコーポレーション
<https://berd.benesse.jp/jisedai/research/detail1.php?id=3200> （2019年12月15日閲覧）
- 松田純子（2006）「子どもの生活と保育-「片付けに関する一考察」」『実践女子大学生生活科学部紀要』43, 61-71